純粹な嫌悪感

紫綺 杭也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純粹な嫌悪感

【Nコード】

N5409V

【作者名】

紫綺 杭也

【あらすじ】

高校に入り、俺は虐めにあっていた。
虐めを切っ掛けにかは知らないが、俺は時々同じ夢を見るようになった。

何時ものように夢の世界に旅立ったはずが、俺がいた場所は異世界……。
これは、こんな俺の物語。

プロローグ

この俺、篠坂 架宮^{かみや}はあらゆる点において優れている人間だった。何も思春期特有の、自分は特別だという誇大妄想をしているわけではない。

母親似の、男にも女にもうける容姿

運動は常に一位で、俺に勝てる奴はいなかった

勉強の成績もトップクラス、高校も第一志望のそれなりに有名な所に合格した。

だが、俺が自覚している内のある一点において、俺は他者よりもはるかに劣っていた。

それは感情だった

周りが劣って見える、会話が馬鹿らしく聞こえる、全てが詰まらなく思える。

何に対しても嫌悪感しか感じない。

もちろん、俺よりも優れている奴なんてこの世界には吐いて捨てる程いる。自分の考えは間違いであり、一人ひとりに優れている面があり、会話の内容はその話しをしている者達にとって価値があるものであり、世界は素晴らしいものであるんだ。

ある時、学校で配られたプリントに電話相談室なんて内容があり、相談してみた事もあった。

一回目の電話は女の人

何を言っても、「うん」、「そっかあ」、「そうかもね」、カウンセラーのマニユアル通り、肯定も否定もしない。

俺は最後まで話さず、電話を切った。

二回目の電話も女の人

今現在の俺の考えと同じように、世界は素晴らしい、と言う主旨を、子供の俺にもわかりやすくかみ砕いて諭してくれた。だが子供心では、その内容に嫌悪感しか抱けなかつたので、途中で電話を切った。

三回目の電話は男の人

この人も俺の考えを肯定も否定もしなかつた。

世界は素晴らしい、でも辛いこともある。でも楽しいこともある、だから素晴らしい

俺は最後に感謝の言葉を述べてから電話を切った。

そうして俺は、今の俺になった、なってしまった。

だからと言って、あの時のカウンセラーが悪い、俺は悪くないなんて子供みたいな事は言わないし、思いもしない。

大体、勉強や運動ならともかく、感情に優劣をつける方がおかしい。

そう、俺はおかしいんだ。

自分が周りより優れていると、俺は不愉快になる。
自分が周りより劣っていると、俺は不愉快になる。
きつと、自分と周りが同じレベルでも、不愉快になる。

決して、相手を見下したりしているわけではない、世を捨てているわけではない。

自分は特別ではない。

ただ、不愉快になる。

そして、嫌悪する。

何が原因かはわからない。

だって、物心ついた時にはこうだったのだから。

いや、子供の頃よりは改善されたと言ってもいいだろう。

改善、と言っても俺にとって都合の良い成長をしただけで、実際は悪化したのかもしれないが。

子供の頃

詳しく説明するならば、六歳前後の頃だ。

少し女顔の、よく泣く男の子

そんな印象を周りに与えていたであろう俺。家庭にも素行にも問題がない、むしろ羨まれるような立場だった俺は、嫌悪と言うものをよく知らない純粋な子供だった。

周りが何かをすると、胸の奥がもやもやする

周りが何もしなくとも、もやもやする

自分が周りといると、もやもやする

自分が一人で過ごしても、もやもやする

このもやもやが、嫌悪だと知らなかったあの頃。

俺は、周りも、周りと一緒にいる自分も、もやもやの対象すべてを拒絶して、泣いた。

俺は自分が嫌いだったが、今は逆に俺は自分が好きだ。

そして、ある程度の自分に都合のよいものなら、受け入れる事も出来るようになった。

むしろ、自分が必要としているもの以外を好きになれない、なる必要性が感じられない。

だから、俺は

自分が好きで皆が嫌いだ

一話目

朝、目を覚ましあくびを一つ。

カーテンの隙間から見た外は薄暗く、今日の天気がよくないことを物語っていた。

カーテンを開けて窓から外を見ると、見えた空はやはり曇天。

いっそ清々しいくらいの曇り空に、思わず笑顔がこぼれそうだ。

さっさと着替えを済ませ、一階にあるキッチンまで行く。

キッチンに行くと、母さんが朝食の準備をしていた。

「おはよう…」

「おはよう、寝癖ぐらいなおしたら？」

「ご飯の後でね…」

もしも高校一年生の男子と、その母親の会話のランキングがあったなら、ランクインしてそうな会話をする。

そんなランキング、詰まらないことこの上ない気もするがな。

冷蔵庫から牛乳を出し、用意されていたコップに注ぐ。

その後席につき、暫くポーツとしていると、パンが焼き終わる。

「いただきます…」

パンには何もつけずにモシヤモシヤと食べる。

朝はあまり食べる気になれないのだ。
ゆっくりと朝食をとっていると、妹が起きてくる。

「ん〜…ママとおに〜ちゃん、おはよ〜」

「おはよう」

「おはよう夏波、ほら顔洗ってらっしゃい」

「ふあ〜あい」

夏波があくびと共に返事をする。

俺が食べ終わる頃には夏波がもどってきて、母が朝食を食べ始める
だろう、それが何時もの事だから。

「しちそうさま」

食器を水に浸し、洗面所へと行く。

歯を磨き、顔を洗い、髪を整えればそろそろ時間だ。

一度自分の部屋に行き、カバンを持って玄関へ一直線。

「行ってきます」

「行ってらっしゃい」

「いっふえふあっふあ〜い」

夏波に、口の中のものを飲みこんでから喋ろ、と言いたいところだ
がそのまま学校に行くことにした。

「痛っ……」

学校の上履きに履きかえようと、靴に足を入れたとたん、痛みが走る。

靴をよく見て、中の靴べらを見ると原因がわかった。

靴べらに刺さっていたのは画鋏、今までは入れてあるだけだったの
で気がつかなかった。

靴べらに刺さった画鋏をごみ箱に捨て、自分の教室へと足を進める。
途中で同じクラスの奴にも会うが無視される。

1年C組、此処が俺の教室、席は一番窓側の後ろから二番目
小説や漫画などにおいて主人公が学生だった場合、殆どこの席に座
るのである場所だ。

ガラッ、と扉を開けると、目の前には雑巾が迫っていた。

クラスの誰かが俺に向かって投げたのだろう、俺はそれを躲し、自
分の席につく。

自分の机を見て、一番最初に目に付くのは 死ね の二文字
それに続き 消える うざい バカ などと書かれている。

これは俺の机だが学校の備品なんだぞ馬鹿が。
そんな事しか考えず、何時も通り家から持ってきた本を読む。

俺のこの反応を見ればわかるだろう、俺は何時もこんな感じだ。そしてこれが、虐めだと言われるものだとして理解している。

虐め、これは強い立場の者（達）が弱い立場の者（達）を肉体的、精神的に苦しめる行為を言う。

俺は明らかに、彼奴等より優れているが、学校側の揉み消しや、人数的に立場は不利だし、彼奴等に苦痛を感じた事はある。

そもそも、俺が虐められる原因は何だったろうか？

どうせ詰まらない事だ、と思う。

例えば俺が学年首席だから

例えば俺が運動能力にも恵まっていたから

例えば俺が眉目秀丽と表現される顔立ちだから

例えば俺が何時もニコニコしていたから

例を挙げてもきりが無い、第一、今この時点で興味が失せてしまった。

ようやく学校が終わった。

俺は部活動には入っていないので足早に家に帰る。

「ただいま」

「お帰り〜」

帰ってきてすぐ、俺は自分の部屋へ行く。

制服をハンガーにかけ、ジャージに着替えてベッドにダイブ。

ああ、疲れた

ベッドに埋もれたまま、今日の出来事を振り返る。

絡まれた時、大きな声で先生を呼んでくれた、名前も顔も知らない男子

靴箱に置いてあった、可愛い女子の物であろう絆創膏
時々机に挟まっている、白い紙の 頑張っ！ の文字

本当に気持ち悪い

俺は自分以外の人間が嫌いだ、大嫌いだ。

好意を向けられるのも、悪意を向けられるのも、両方とも大嫌いだ。
悪意も好意も同じくらいに大嫌いだ。

「気持ち悪い…いつそ自殺でもしようか？」

そんな気は毛頭ないが。

少し苦笑しながら、仰向けになり、寝る体勢になる。

学校から帰ったら、一日を振り返り、一眠り。

これが高校に入り、周りの関心の対象になってからの俺の日課だ。

そして、何時ものように。

幸せな夢をみる…。

二話目

「んっ……」

目を開けると、真っ白な空間が広がっていた。
何時もの、不思議で、幸せな夢。

「あ、架宮だ！」

「架宮！」

白い雪のようなものがフワフワと俺の周りを飛んでいる、何時もなら全てに対して嫌悪感を抱くが、この夢の中だと不思議と嫌悪感はない。
むしろ、心が温かくなる。

「架宮！危ないよ！」

「架宮！逃げて！」

この子達は、まるで雪の精霊みたいだ。
可愛いなあ、俺の周りを必死に飛ぶ姿は、本当に可愛い。

…必死に？

おかしい。

何かが、心が、冷めてゆく感覚。

「架宮！架宮！」

「…っ！」

気が付くと、辺りは真っ黒になっていた。

怖い、そう思った。

そしてその考えに違和感を覚える。

怖い？

俺は今まで、嫌悪と退屈、幸福感こそ感じたことはあるが、何かを怖いと思ったことはなかった。

〔架宮…〕

不意に、声が聞こえる。

暖かくて、優しい声。

〔……架宮〕

「何なの？」

〔…架宮〕

問い掛けても、名前を呼ぶだけ、姿も見えない。

でも、声が聞こえるならいい……。

〔世界の、バランス、崩して…〕

姿の見えない雪の子は、ポツリポツリと何かを伝えようとしている。ハッキリ言っただけの内容など既にどうでもよかったが、ある言葉を聞い

た瞬間俺は食いついた。

「バランス、崩れない、終わる、この世界」

終わる、この世界。

この世界とは、この俺の見ている夢のことだろう。
つまり、この夢が見れなくなると言うこと。

それは困る、この夢は俺の癒しの場だ。

「この世界、守って？」

「……この夢の世界、守ってあげるよ」

そう言った瞬間、俺の目の前が真っ白にもどる。

雪の子達はいなかった
が、かわりに見覚えのない真っ白い服を着た男と、真っ黒い服を着た女がいた。

「誰…？」

男の顔は整っており、白い腰まである髪、銀色に光る目、雪のような肌、身長は高めでスラリとしたモデルのような体つきをしていた。女の顔も整っていたが、綺麗よりは可愛い系の顔、黒いツインテールにしてある長い髪、褐色の肌、底が見えない闇のような目、背は低めだがこちらモデルのような体つきだった。

二人とも、今から舞踏会にでも行くような派手な礼服を着ている。

「…あれだけの恐怖を見せ付けたのに、何故だ？」

女が口を開く、俺に聞いているのではなく、自問しているようだった。

「別にいいじゃん、それよりも早くバランスを崩してもらわないと……」

バランスを崩す、先程雪の子が言っていた言葉だ。
この真っ白い男、雪の子だったなんて言ったらどうしようか？

「そうだったな…、篠坂架宮、お前は何を望む？」

いきなりの問い掛けだ、別に俺には望むことなんてない。

「別がない」

「は？……あー、篠坂架宮、お前は这个世界を救ってくれるか？」

「条件にもよる」

「……おい、本当にコイツで大丈夫なのか？」

「え？でも、この人以外いないよ？」

態とかは知らないが、十分俺にも聞こえる程度の音量で男女は話している。

「えーっと、架宮は这个世界を救ってくれるって言ったよね？」

「ああ、言ったな」

「なら、この世界を救ってくれるんだよね？」

「？具体的には何をすればいいんだ？」

俺がそう言つと、男は笑顔になる

何処か見たことあるような気がして、この男は雪の子なんだなと確信した。

「架宮にはこれから異世界に行つてもらつて、その世界のバランスを崩してもらつんだよ！」

「……普通は世界を救つとかじゃないのか？」

「バランスを崩す事によつて世界が救われるんだよ」

「…世界のバランスは、どうやって崩せばいいんだ？」

「……白蓉……」

どうやら、目の前の男にはわからないらしい。

「はあ、……今、あの世界は様々な種族で形成され、バランスを取り合っている、その種族のどれかのうち、一つに加担すればよい」

先程まで空気だった白蓉と呼ばれた真つ黒の女が言う。
名前とあってないな……

「聞いているのか!？」

「あゝ、つまりどつかの種族以外を皆殺しにしると？」

「ああ、そつだ」

「いや、もつと平和的になろうよ？相手を支配下におけば殺さなくてもいいんだよ？相手の種族は永遠に奴隷になるけどさ」

「黒蓉こくよう、支配や奴隷などって言っている時点でお前の考えは平和的とは言わない」

「……………」

黒蓉と呼ばれた真つ白の男は黙ってしまった。

予想はしていたが、こつちも名前にあっていない、何だかコントを見せられた気分になってしまった。

「…そんな事より、この世界が終わるってどういう事？」

「そのままの意味だ、お前がやらなければこの世界は消えてなくなる、お前も二度とこの世界に来れなくなる」

「それは困る」

「なら異世界に行き、使命を全うしろ」

「準備はもつできてるよ！」

「……………最後に、何で俺なんだ？」

「お前にしか出来ない事だからだ、まあ、向こうに行けばわかるだ

ろっかな」

「要するに、架宮は選ばれた人間ってやつなんだよ！」

「ふーん…選ばれた、か…」

「それじゃあ、いってらっしやい！」

黒容にそう言われた瞬間、俺は眠りから覚めていった。
おかしな夢を見たな、なんて思いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5409v/>

純粋な嫌悪感

2011年11月16日11時27分発行